

小学校英語教科化：より良い指導内容および指導法を考える その1 ——語彙選定について——

山下千里

キーワード：小学校英語，教科化，語彙選定

1. はじめに

平成20年(2008年)の学習指導要領の改訂に伴い、平成23年度から小学校において外国語(英語)活動が必修となった。第5学年および第6学年において、週1コマ(年間35時間)を充てて「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養い、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しみながら、コミュニケーション能力の素地を養う」(文部科学省, 2008)ことを目標に実施されている。

しかし、平成25年12月13日の定例記者会見において、下村博文文部科学大臣は、「学習した語彙や表現を活用して自分の思い等を相手に分かりやすく伝えたり、内容的にまとまりのある一貫した文章を書いたりする力が十分に身に付いていないという場合がある」(文部科学省b., 2013)ことを中学・高校における現状として指摘し、教育再生実行会議第3次提言を踏まえ、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小中高等学校を通じた英語教育改革を計画的に進めるための「英語教育改革実施計画」を発表した(文部科学省a., 2013)。

この計画の中で、小学校英語正式教科化も明確にされ、2020年(平成32年)より新たな英語教育が本格展開できるように、2014年度から体制整備を含め逐次改革を推進する(文部科学省a., 2013)ことが示されている。グローバル化に対応した英語教育改革実施計画のイメージによると、小学校英語教育推進リーダーの加配措置や小学校専科教員の養成研修、ALT等の配置拡大・指導力向上研修、英語教育強化地域拠点の指定による先進的な取り組み促進などと共に、教材・教科書の実施計画スケジュールも以下のように提示されている(文部科学

省a., 2013)。

2014年度	新教材開発
2015年度	新教材の配布
2016年度	学習指導要領改訂
2017年度	新CS対応教材作成，教科書作成
2018年度	新CS対応教材配布，教科書検定
2019年度	教科書採択
2020年度	教科書配布

これまでに文部科学省から全国の希望小学校へ配布された「英語ノート」および“Hi, friends!”は、「コミュニケーション能力の素地を養う」ことを目標に掲げ、開発された教材であるが、新たな英語教育の目標・内容等案では、素地を養うことはそのまま小学校の中学年へ移行され、「読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う」(文部科学省a., 2013)ことが高学年の目標になる。学習指導要領の改訂に伴い、英語が小学校において教科化されることで、目標や授業時間数の変更を踏まえ、児童に必要な教材や教科書、またその指導法について考えることが必須である。そこで本稿では、新しい英語教育の目標および、目指す言語レベルから、その中で取り扱うべき語彙について検討したい。

2. 児童が目指す目標

平成25年12月13日に文部科学省は、「英語教育改革実施計画」において、小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を設定し、「英語によるコミュニケーション能力を確実に育成する」(文部科学省a., 2013)ことを発表した。さらに、中学校においては、全て英語で授業を行うということであるので、小学校においても慣れ親しむことを核にしながらも、実践的コミュニケーションを視野に入れた英語教育が求められることになる。また、中学校の到達目標として、「身近な事柄を中心に、コミュ

所属：リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科(2007～2012年度)

ニケーションを図ることができる能力を養う」とし、具体例としては、「短い新聞記事を読んだり、テレビのニュースを見たりして、その概要を伝えることができる」、などとしている。英語能力のレベルとしては、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning teaching, assessment 外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠) のA1~A2程度とし、日本の実用英語検定で示す場合は、3級~準2級程度等としてある (文部科学省a, 2013.)。

小学校高学年は、その前の段階にあたり、新たな英語教育の目標は、「読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う」である。具体的な能力としては、「馴染みのある定型表現を使って、自分の好きなものや、家族、一日の生活などについて、友達に質問したり、質問に答えたりすることができる」(文部科学省a, 2013), という例をあげている。そこで、まずCEFRのA1レベルおよび、CEFRに準拠し、日本の英語教育の枠組みに適用させて構築されたCEFR-JのPre-A1レベルについて確認することとする。

2.1 CEFRのA1レベル

これは中学校における新たな英語教育の目標レベルとしてあげられているが、全体的な尺度としては、基礎段階の言語使用者のレベルで、「具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる」(吉島他, 2004, p. 25) としている。

2.2 CEFR-JのPre-A1レベル

投野によれば、Pre-A1レベルは、CEFR-J独自のもので、日本の入門期の英語教育を考慮した場合、CEFRのA1レベルより低いレベルが必要との判断で、CEFRのA1レベルの前段階として、設置された (2013, p. 142)。中学の目標レベルがCEFRのA1~A2程度であるならば、小学校の目標レベルは、このCEFR-JのPre-A1程度に相当するとも考えられる。具体的には、「ゆっくりはっきりと話されれば、日常の身近な単語を聞き取れる。英語の文字が発音されるのを聞いて、どの文字かわかる。また、口頭活動ですでに慣れ親しんだ絵本の中の単語を見つけることができる。ブロック体で書かれた大

文字・小文字がわかる。基礎的な語句を使って、『助けて!』や『~が欲しい』などの自分の要求を伝えることができる。必要があれば、欲しいものを指さしながら自分の意思を伝えることができる。一般的な定型の日常の挨拶や季節の挨拶をしたり、そうした挨拶に応答したりすることができる。簡単な語や基礎的な句を用いて、自分についてのごく限られた情報(名前、年齢など)を伝えることができる。前もって話すことを用意した上で、基礎的な語句、定型表現を用いて、人前で実物などを見せながらその物を説明することができる。アルファベットの大文字・小文字、単語のつづりをブロック体で書くことができる。単語のつづりを1文字ずつ発音されれば、聞いてそのとおりに書くことができる。また書いてあるものを写すことができる」(投野, 2013, pp. 294-301) としている。

3. コミュニケーションに必要な語彙

CEFRのA1レベルやCEFR-JのPre-A1のような入門期のレベルとして設定されている能力が、そのまま子どもにとって実際に必要な初歩的なコミュニケーション能力であるのかは、疑問であり、実践的なコミュニケーション能力を養う上では、無視できない問いである。子どもにとって興味があり、理解しやすく、積極的にコミュニケーションに関わりたくなるようなこととはどのようなものなのか。日本の現状においては、あくまでも外国語としての言語であるので、実践的な能力を育むのは教室内であり、その限られた中のセッティングでいかに意味ある実践を成立させるかも大きな課題であろう。今回、語彙の選定を考えることが、この課題攻略への一歩になればと考える。そこでここでは、先行研究の中から児童用語彙と子どもの日常生活語彙、そして、文部科学省発行の教材の中の語彙を見てみる。

3.1 児童用語彙

石川 (2008, pp. 183-197) は、日本人児童のための基本語を研究し、選定を試み、英語コーパスに日本語コーパスを併用し、単語頻度表を加えるなどして1847語の英語語彙表を作成した。その全容は非公開(追加情報を付与した上で公開されている)となっているが、上位100語は表1のとおりである。いくつかの単語は、品詞を特定しかねる(例、Japaneseなど)ので、100語中に占める品詞の割合を正確に出すのは難しいが、代名詞と動詞が一番多く、それぞれ20単語ほどある。次に副詞、

表1 最終語彙表（上位100語）

1	the	26	they	51	come	76	take
2	and	27	but	52	when	77	CD
3	I	28	my	53	oh	78	first
4	to	29	with	54	about	79	some
5	a	30	like	55	laugh	80	people
6	you	31	are	56	if	81	will
7	of	32	her	57	think	82	want
8	it	33	we	58	how	83	good
9	yeah	34	at	59	him	84	would
10	in	35	not	60	look	85	who
11	is	36	know	61	just	86	here
12	do	37	be	62	yes	87	right
13	that	38	me	63	out	88	investigate
14	was	39	so	64	from	89	tell
15	he	40	all	65	then	90	day
16	go	41	one	66	make	91	little
17	she	42	his	67	well	92	ok
18	this	43	as	68	them	93	thing
19	have	44	there	69	were	94	why
20	what	45	had	70	now	95	Japanese
21	for	46	your	71	very	96	been
22	say	47	see	72	by	97	play
23	on	48	mom	73	time	98	mum
24	get	49	can	74	or	99	school
25	no	50	up	75	other	100	down

(石川, 2008, p.196 表9)

そして前置詞、形容詞、助動詞、名詞などであるが、名詞は上位100語の中では、10語以下である。

3.2 子どもの日常生活語彙

西垣他（2007）は、日本の英語教科書における日常生活語彙不足の問題改善に、小学校英語が期待されているとし、独自の方法で日常生活語彙500を選定している。西垣等はまず、英語教科書などに出現しない日常生活語彙が多く含まれる英語絵辞書に着目し、30冊の英語絵辞書（英語を母語とする3国に加えて、第二言語とする海外で出版された20冊、日本国内で出版された英語絵辞書10冊）を分析して得た5,259語を異なる絵辞書に出現した頻度を調べ、レンジという基準を設け、より多くの絵辞書に出現する語は、より重要と判断して位置づけている。また、絵辞書が印刷された教材、つまり書き言

葉の範疇に入ることから、子どもの話し言葉を口頭言語のデータベースであるCHILDES（Child Language Data Exchange System）の中からも頻度の高い語を抽出し、大人の話し言葉と比較して、子どもの話し言葉コーパスの特徴度の指標値を4,161語につけ、上記の5,259語ともども、英語母語話者の子どもの習得学年などの資料を鑑みて順位をつけて、上位から順に500語を選定したとしている（西垣他, 2007）。名詞、動詞、形容詞の3品詞に分けてリストが作られており、内訳は、名詞392語、動詞72語、形容詞36語で、名詞が8割近くを占めている。

3.3 文部科学省作成の外国語活動教材に使用されている語

現行の学習指導要領の目標を達成するために選定された語彙について調べてみた。平成20年11月11日に行わ

れた行政刷新会議「事業仕分け」をきっかけに、平成21年度から23年度まで配布されていた「英語ノート」に代わり、“Hi, friends!”が外国語活動教材として作成され、平成24年3月末に文部科学省から希望する全小学校に配布された(直山, 2013, p. 6)。児童用テキスト“Hi, friends! 1”(第5学年用)および“Hi, friends! 2”(第6学年用)を見ると、全単元に音声教材を基にした4種類の活動、“Let’s Listen”, “Let’s Sing/Chant”, “Let’s Play”, “Activity”は入っているが、単語を探してみると、看板などのイラストの中や会話内容を示す文として出されており、単語という形ではほとんど掲載されていない。そこで、授業の主軸を担う“Let’s Listen”, “Let’s Sing/Chant”, “Let’s Play”, “Activity”の音声教材も含めて調べると、単語としては、“Hi, friends! 1”には約270語、“Hi, friends! 2”にはおよそ420語、延べ700語近く(重複を除くと600語近く)が収められている。内訳は、名詞が400語以上と圧倒的に多く、動詞は約40語、形容詞はおおよそ60語、代名詞他はおおよそ70語であった。

3.4 単語の種類

それぞれの単語をリストにしてみると、特徴が見えてくる。まず、3.1の児童用語彙上位100語では、名詞の占める割合が低かったのに対し、3.2で取り上げた子どもの日常生活語彙500語と3.3の“Hi, friends!”2冊で扱われている約600語では、圧倒的に名詞が多い。しかし、内容に目を向けると、同じ名詞でもカテゴリーの内容は異なっている。例えば、head, faceなどの体の部位について、子どもの日常生活語彙では25単語、Hi, friends! では、eyeとlegの2単語で、動物についても、子どもの日常生活語彙は鳥や虫なども入れて72単語、Hi, friends! では、20単語である。Hi, friends! で顕著な名詞としては、教科名、国名や都市名、建築物、職業、月や曜日などの単元で取り上げた話題に関わるものが多い。

次に、動詞を見ると、子どもの日常生活語彙は、cooking & eating, daily life activities, feelings, playing & studyingの4つのカテゴリーに分けてリストになっている。例えば、Hi, friends! 1の名詞の中でも一番多いのが野菜や果物などの食物に関わる単語であるが、食物に係るcooking & eatingに入る動詞を見てみると、Hi, friends! では、cook, eatの2語に対して、子どもの日常生活語彙では、cook, eat, drink, bite, cut, break, mix, pour, bakeの9語がリストにある。特にHi, friends! 1では動詞が少なく、Nice to meet you. やThank

you. などのよく使われる文の中にある動詞を含めても、like, want, watch, eat, clean, study, know, start, come, listenなどの10単語ほどである。

4 必要な単語について

どのくらいの語数が必要であるかは重要な検討事項であるが、まず、学習語彙として適当な語数について、授業時間数から考えてみる。第3学年、第4学年で、各週1コマから2コマとは、年間35時間から70時間に相当し、第5学年、第6学年で週にモジュールを含めて3コマとは、年間105時間に相当する。第3学年から英語の授業が開始されると、第3学年と第4学年で授業数を変更するとしても、小学校における4年間の英語の総授業数は、280時間から350時間になる(表2)。つまり、現行の倍の年数をかけて、4倍~5倍の授業時間数が配当されることになる。

使用単語数についてリクソン他(2013)は、全単語数を授業時間数で割る算出法で、その語数の妥当性について検討することを提案している。例えば、現行の“Hi, friends!”で扱われる単語(約600語)を小学校での総授業数(70時間)で割ると8.57語になる。教科化後の総単語数を500語とすると、総授業数が280時間の場合は、1.78($500 \div 280 = 1.78$)で、350時間の場合は、1.42($500 \div 350 = 1.42$)になる。小学校4年間をかけて構築する語数として考えてみると、計算上は、1授業時に1~2単語を学習することになり、総単語数が1500語であれば、その3倍になる。小学校英語の場合、スパイラルに何度も使用したり、インプットの効果を考えて、ある程度まとまった量を繰り返し使用したりすることも取り入れた上で、語数および語の選定をするべきであると考える。

今回提示された、2018年度からの段階的な実施を計画されている新たな英語教育の目標では、小学校の高学年でも初歩的な英語の運用能力を養うことがあげられ、小中高を通じて実践的な英語能力の獲得を目標としている。中学校では、授業も英語で行うことを基本として、内容に踏み込んだ言語活動を重視する(文部科学省, 2013a.)となっている。中学になってから内容に踏み込んだ言語活動を英語で行えるようにするには、小学校において、忘れ物の貸し借りなど、日常的な子どもにとっての必要事項のやり取りや、少なくとも授業内での初歩的な活動は、子ども同士でも英語で行えるようにしておかなければ、中学になってからの生徒の負担が大き過ぎ

表2 英語の年間授業数と小学校での総授業数

	1年目 第3学年	2年目 第4学年	3年目 第5学年	4年目 第6学年	計
中学年週1時間 高学年週2時間および モジュール1時間	35時間	35時間	70時間 モジュール35時間	70時間 モジュール35時間	280時間
中学年週1時間 高学年週3時間	35時間	35時間	105時間	105時間	280時間
中学年週2時間 高学年週2時間および モジュール1時間	70時間	70時間	70時間 モジュール35時間	70時間 モジュール35時間	350時間
中学年週2時間 高学年週3時間	70時間	70時間	105時間	105時間	350時間

るであろう。

石川は、教科書の改善の手がかりは、教材の語彙と標準的な英語の語彙の乖離の状況をより詳細に分析してゆくことによって得られるだろう（2008, p. 181）と書いているが、その他にも教室内での実践をより現実的に意味のあるもの、すなわち教室内において、生きた英語を身に付けるために必要な語彙も含まれるべきである。また、現行教材は、名詞重視の傾向にあるが、動詞や形容詞の比重についても検討しなければならない。さらに、高学年の子どもが教室内で英語でやり取りをするには、やる気や好奇心を駆り立てる必要があり、本気を出しても恥ずかしくない本物の実践を目指すことができる単元や話題を含めるべきである。今後、学習のテーマ、取り上げる話題や活動についても、さらに考えていきたい。

引用文献

石川慎一郎（2008）英語コーパスと言語教育 ―データとしてのテキスト― 大修館書店
 シーラ・リクソン、小林美代子、八田玄二、宮本茲、山下千里（2013）チュートリアルで学ぶ新しい「小学校英語」の教え方 玉川大学出版部 p. 115
 投野由紀夫編（2013）CAN-DOリスト作成・活用 英語到達

度指標CEFR-Jガイドブック（CD-ROM付）大修館書店
 直山木綿子（2013）小学校外国語活動のあり方と“Hi, friends!”の活用 東京書籍
 西垣知佳子、中條清美、樫村雅子（2007）小学校英語における日常生活語彙の指導―語彙選定と英語カルタの開発・活用― 千葉大学教育学部研究紀要 第55巻 pp. 255-270
 文部科学省（2008）小学校学習指導要領
 文部科学省（2012a.）Hi, friends! 1 東京書籍
 文部科学省（2012b.）Hi, friends! 2 東京書籍
 文部科学省（2012c.）Hi, friends! 1音声CD 東京書籍
 文部科学省（2012d.）Hi, friends! 2音声CD 東京書籍
 文部科学省（2013a.）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について 文部科学省 初等中等教育局国際教育課外国語推進室 2013年12月13日発表 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm 2013/12/19 閲覧
 文部科学省（2013b.）下村博文文部科学大臣記者会見録（平成25年12月13日）映像版およびテキスト版 http://www.mext.go.jp/b_menu/daijin/detail/1342209.htm 2014/1/6 閲覧
 吉島茂、大橋理枝他訳編（2004）外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠、朝日出版社

（やました ちさと）